

生徒が抱えている問題発見・解決のシステムと校内支援体制

— 教育相談体制の変革と学校の活性化 —

横 田 克 哉 (札幌創成高等学校)

1. はじめに

現在学校が直面している問題を大雑把に列挙しても、不登校、いじめ、学力低下、規範意識の欠如、子どもの無気力、発達障害など多岐にわたっている。このような課題にたいして、教育現場は生徒への対応はもちろん、保護者への対応にも苦慮している。と同時に、生徒も保護者もそれぞれの立場で悩みを抱えている。学校が抱えている問題は複数の因子が複雑に絡み合って生ずる。問題解決のために、その因果関係をいたずらに追求しても、かえって問題の本質に霧がかかり効果は望めない。「犯人さがし」をするのではなく、可能な限り協働する体制をつくるほうが現実的には得策である。

文部科学省第4回不登校問題に関する調査研究協力者会議(2002年)は、スクールカウンセラーを活用した教育相談体制の変革によって学校そのものを活性化することを求めている。しかし、それには「学校の機能が生かされ」、「外部の専門家との連携が十分に機能する校内体制」の確立と、教職員どうしの協働による支援体制の充実が求められている。

スクールカウンセラー(SC)やスクールソーシャルワーカー(SSW)などの外部の専門家を導入しても、受け入れる側の教職員の意識と学校組織の改革がなければ効果は半減する。意識と組織の改革が功を奏しなければ、現行の学校教育制度に適応できない生徒がますます増え続けるだろう。そして単位制通信教育制高校等への進学や転学、保健室登校・相談室登校の生徒の増加は必至である。

2. 家庭と学校とのコラボレーション

国家、地域社会、学校、親戚、家族という何重もの「守り」の内で、子どもは自我確立の道を歩みはじめ、規範意識を身につける。しかし現在、ボーダレス社会、地域社会の崩壊、核家族、少子化により、人間的成長にとっての物的・人的環境が悪化している。貧富の差による格差社会は「希望格差社会」を生み、機能不全家族の増加により、規範意識の乏しい脆弱な自我が学校に送り込まれ、児童生徒は集団不適應を引き起こし学級崩壊状態になることもまれではない。

学校に不適應をおこす生徒の多くは人間関係形成力が低い。些細なことで心が傷つき、集団になじめずに安易な方向へと逃避する。欲求不満耐性が低いうえに、自己変革の気力が衰えている。表面的な知人はいるが、ほんとうの友人は少なく、人間関係がきわめて希薄である。ホンネを語れる人が周囲にいない。人間関係の距離感がつかめずに過剰依存と無関心の間を振り子のように揺れている。同性グループのメンバーや異性との交際相手も2ヶ月単位で入れ替わる。豊かな人間関係を形成するスキルや学力の低下も著しい。睡眠障害や発達障害の子どもも増えてきた。このように多岐にわたる問題を家庭だけで解決することは困難であり、ましてや学校だけで解決できる問題でもない。では、どうしたらよいのか。

家庭の教育力の低下は全国的にも保護者自身が認めている。この事実をふまえて子どもの教育を考えたとき、たとえ家庭の問題でも教員は保護者と可能な限りコラボレート(協働)して問題を解決することが求められている。学校は家庭教育を補完する役割も担う時代になったのである。

3. 具体的な取り組み(Ⅰ) 本校の校内支援体制の形成

〈問題早期発見のシステム〉

(i) 「月3日ルール」

不登校生徒を減らすには、早期発見と早期対策が最大の効果を生み出すという観点から、本校では「月3日ルール」を実施している。これは『教師のための不登校サポートマニュアル』(小林正幸)の方法を採用したものだ。

月3日の欠席が10ヶ月重なれば年間30日の欠席になり、「月3日」程度の欠席をきっかけにして不登校開始が本格化すると調査結果が報告されている。この方法は担任に心理的負担がかかるという短所があるが、担任が生徒の問題と向き合う機会を得るという長所がある。そこで本校では、「月3日」欠席した生徒については例外なく、HR担任からは「生徒別個票」(資料1)を提出してもらい、教育相談センターがまとめて管理職に報告している。

(ii) 「遅刻・早退」率の調査

不登校は欠席という形だけではなく、遅刻や早退という形でも早期に現れる。ひとり一人について正確に把握することはできないが、本校では毎月教務部から「月末統計表」(資料2)が出るので、クラスごとの遅刻率と早退率がわかり、クラス状況や不登校傾向生徒の読み取りがある程度わかるようになっている。

(iii) 保健室の利用状況

毎月保健室からクラス毎の保健室利用率と利用回数の多い生徒氏名が報告される。身体的に病だけではなく、心の悩みが身体的症状として現れている場合も多いので生徒情報としての質が高く、たいへん参考になる。また本校の養護教諭は教育相談に協力的なので日頃から密に連絡をとり、心の悩みを訴える生徒、人間関係で悩んでいる生徒、自傷行為のケース等について適宜連絡をくれるので、その都度保健室付属の相談室でカウンセリングをしている。

(iv) HR担任と教育相談センター教員からの情報収集

学級経営に関心の深いHR担任からは「学校に行きたくない」「学校を辞めたい」という生徒について適宜報告を受けている。また分掌の教育相談センターに所属している先生からも情報を収集している。ときどき出席簿の点検もしている。

(V) 学級経営状態を知るための「アンケートQ-U」の実施

「アンケートQ-U」(資料3)は2つの心理テストから構成されている。(A)やる気のあるクラスをつくるためのアンケート、(B)いごこちのよいクラスにするためのアンケートである。

Q-Uは、不登校の予防、いじめの発見・予防、学級崩壊の予防、教育実践の効果測定、子ども個人と学級集団の情報を得るためには最適である。これを実施することで、学級生活における生徒の満足度、学級集団の成熟状態と雰囲気、不登校・いじめ・学級崩壊に関する情報も得られる。

「Q-U」は学級経営状態を的確に診断し、深刻な状況になる前に改善箇所を見つける最高のツールであり、観察法や面接法ではわからない生徒情報や学級情報がたくさん得られる。

〈問題解決のシステム〉

筆者は5年前に本校に勤務し、それ以来教科指導をしながら分掌は一貫して教育相談を担当してきた。本校勤務前は、カウンセリング分野では応用心理士としてカウンセリングをしていた。主に個人を対象に箱庭療法、コラージュ療法などを使っていたので集団を対象にする経験があまりなかった。

通常のカウンセリングは、密室のなかでカウンセラー(以下C o)とクライアント(以下C 1)が一对一で対面し、1回50分間、外部と遮断された相談室で面接をする。このような環境で筆者、受容・支持・繰り返す・明確化などの技法を使用し、箱庭療法やコラージュ療法なども併用していた。

しかし本校に赴任してから、与えられた環境と限られた時間内で成果を出すには、従来の方法では通用しないことがわかり、教育相談担当として何が出来るかを試行錯誤してきた。学校現場では、個人レベルでと集団レベル(学級・学校全体)で、適用する援助方法を明確に分けて考えることが重要である。個人レベルでは、通常のカウンセリングの他にアセスメントとコラージュ療法が有効である。集団レベルで有効性が明確に認められたものとして、理論的には学校心理学、手法としては「学校カウンセリング」、「チーム援助」がある。

(i) 個人レベルでの対応 折衷主義の立場

自分を表現して、それを心の底から聴いてもらった、受け容れられたという体験は生徒に大きな安心感をもたらす。「人間関係によって傷つけられた心は人間関係によってのみ癒される」という言葉はカウンセリングの基本である。受容されたという体験が生徒を勇気づけ、問題と立ち向かう意欲を引き出す。生徒の立ち上がる力を信じて話をじっくり聴く来談者中心療法の姿勢と技法は、これからも教育相談の基本として不変の支持を受けるだろう。

しかし傾聴だけで生徒の行動変容を起こすのは難しい。たとえば交流分析でいう「ゲーム」(破壊的な人間関係)に執着する生徒・保護者は多い。いくら傾聴しても相手の行動変容には結びつかない徒労感がC oの心を衰弱させる。その場合は、信頼関係をベースとしつつ、自分の問題と向き合える言葉を相手に返すことも必要である。また積極的に「ほめる」ことを勧める解決志向アプローチもいまの生徒には効果があり、教員にも

習得しやすいようである。

アセスメントも大切である。観察法だけで生徒の心理状態を知ることは難しい。数年前に、友人関係のトラブルで別室登校をしていた生徒のケースがあった。観察法と面接法では教室復帰のタイミングがなかなかつかめなかった。そこでエゴグラムとバウムテストを実施したところ、教室復帰が可能だと明らかに判断できたので、それを生徒にフィードバックして成功したケースがある。その後、アセスメントの結果をフィードバックして失敗したケースはない。

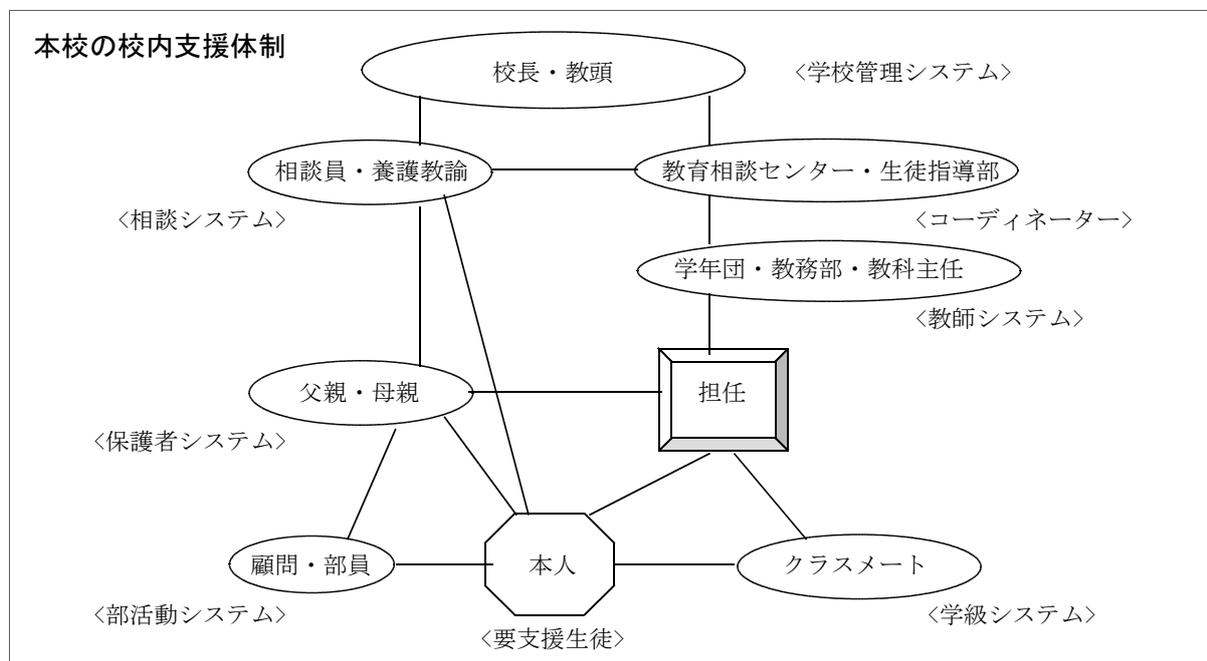
(ii) 集団レベルでの対応 「チーム援助」という発想の重要性

「チーム援助」という言葉は学校心理学から生まれたことばである。通常のカウンセリングではC oとC 1の1対1の密室での対面方式が前提となっているので、C oはC 1の問題を抱え込みがちになる。近くにスーパーバイザーがいればよいが、そういう恵まれた環境にいるC oは少ない。C oは自分だけで問題を処理しなければと思い悩むことになる。

本校に赴任した当初、筆者もそういう傾向に陥っていた。しかし学校は組織であり、教職員がお互いに協力しあうことで一人ではできないことでも可能になる。生徒の周囲には、担任、教科、部活動、養護等の各先生がおり、保護者、地域の相談員、精神科医、クラスメートなど多様な援助者がいる。「チーム援助」は、周囲の人たちが一緒になって生徒の成長を援助しようとする。合い言葉は、「子どもの力を生かそう。援助者の力を生かそう。みんなが資源。みんなが支援」(石隈利紀)である。

〈学校カウンセリング 家庭と学校とのコラボレーション〉

C oという専門家だけが不登校傾向生徒に関わるのではなく、生徒の周囲にいる資源を活かしてみんなで支援するという「チーム援助」の発想は画期的である。しかし「チーム援助」を機能させるには必要条件がある。支援する人たちの関係が良好であるということだ。その問題を取りあげている『学校カウンセリング』(田上不二夫、中村恵子)の取り組みは特筆に値する。中村は、「児童生徒への校内支援システムモデル」を紹介しているが、それをアレンジして筆者は使用している。それが「本校の校内支援体制」(下記図表)である。本校は高校なので、クラスメートと部活動の顧問・部員の果たす役割は大きい。そこで支援システムに〈学級システム〉〈部活動システム〉として組み込んだ。



校内支援体制のなかで最も重要な役割はコーディネーター(以下C n)である。なお本校ではS Cを設置していないので、教育相談センター長がC oを兼務している。

本校のC nは、不登校傾向生徒については教育相談センター長、いじめ問題については教頭になることが多い。C nは、楕円のなかの人間関係、楕円・四角・八角形どうしの関係性を見定めてから支援体制(援助チーム)を明確にして援助を実施する。

田上・中村は、人間の関係性を5種類に分類している。①「連合や同盟の密着した関係」、②「適度に親密

な関係)、③「疎遠な関係」、④「仲違い・葛藤関係」、⑤「別離・縁切り・遮断関係」である。本校でも、それらの関係性を考慮して、効果的な支援体制(援助チーム)を個々のケースごとに考えて支援を実施している。本校でも、それらの関係性を「良好」「疎遠」「対立」の三段階に分け、個々のケースごとに効果的な支援体制(援助チーム)を考えて支援を実施している。

4. 具体的な取り組み(Ⅱ) 事例 不登校傾向生徒への「チーム援助」 部活とクラスの雰囲気になじめないと訴える高校2年生男子のケース

#1 家庭訪問(同席者:母親、本人、Cn)

5日間欠席が続いたので担任に連絡をとってもらい家庭訪問をした。

本人は中学生のころにも1ヶ月間不登校になったが、伯父の説得と同級生の協力で教室に復帰したという経緯がある。母親と話をしたが、両親には特に問題はない。ただ父親は息子との接点がなく母親に子育ての負担がかかっている。本人と話をすると「楽しいことが何もない」「夜寝ると幻聴がするので恐くてなかなか眠れない」「クラスでふざけている生徒がいて、他の生徒にいやがらせをしているのを見るのが嫌だ。」「部活がいやだ、顧問の先生と合わない。」など話してくれた。

ほとんどがネガティブな話だったが、そのなかに「クラスでは仲のよい友人が3人ほどいる」という話を聞いたので、チーム援助の発想で〈学級システム〉を活用することにした。高校生にとって友人関係は重要なポイントになるので、クラスメートの支援も期待できると考えた。チーム援助を生かすため、担任とクラスとの信頼関係にも留意することにした。

今後の方針として母親に二つのお願いをした。一つは、登校できない場合は担任に電話連絡をすること。もう一つは、ときどきCnが家庭訪問することに同意して欲しいこと。

#2 校内面接(同席者:母親、伯父、担任、Cn)

欠席が続いているので担任に頼んで母親に来校してもらい面接する。

母親が一人で来校すると思っていたら伯父と一緒に来た。母親はほとんど話さないで、伯父が面接の主導権を握り、「クラス内にいじめがあるのではないかと問いかけてきた。それに対しては「先日調査をしたが、いじめの事実はない。」と明確に説明した。

伯父が本人を学校まで送るといっても、「自分の意志で登校できなければ意味がない」と言って結局登校しない。ここでも父親の存在が見えてこないのが気になる。

前の夜には「明日学校へ行く」といって勉強道具の用意をするが、翌朝になると目覚めが悪く(夜寝るのが遅く、女性の声の幻聴が聞こえるらしい)、朝食後に自分の部屋にもどって寝ている。「遅刻してでも学校に行く」と本人は言うが結局登校しないことの繰り返しである。

以上から、今後の方針として〈保護者システム〉内の関係形成にも留意することにした。

#3 電話相談(伯父からCnへ)

伯父から電話がある。本人が「部活の顧問に、ひどいことを言われて心が傷ついた。自分の口からは言えないが、友人は知っている。顧問の先生が謝るなら自分は学校に行く」と言っているらしい。本当にそういう事実があるか再度調査して後日また連絡すると伝えた。(なお後日調査したが、そういう事実はなかった)

以上から、保護者と部活動の顧問との関係修復も本ケースの課題にすることにした。

#4 校内面接(同席者:父親、Cn)

初めて父親と会って話す。優しく控えめな人柄である。伯父は少し粗野なところがあるが、父親は伯父とは対照的で物腰が穏やかである。父親、母親、伯父のひとり一人は善良で常識のある大人であるが、家族共同体としてみると父親に存在感がないので、父性原理が家族内で十分に機能していない。

そこで〈保護者システム〉(父親)と〈本人〉との関係を強化するためにアドバイスをした。「お父さん自身が日常生活で楽しみを見つける」「男子は父親を見ながら男らしさを身につけるので趣味は子どもと一緒に楽しむ」「子どもの将来について奥様の三人で話し合う」など父親に伝えた。

さらに〈保護者システム〉と〈部活動システム〉の信頼形成をはかるために、部活動の顧問は「部活を休むときには顧問に直接申し出るという約束を守らなかったため、その点については注意した。誤解があるなら本人と直接会って話をしたい。」と言っていたと伝えた。顧問だけに謝らせるのは教育上よくないことであり、本人にも非があることを認めさせなければワガママを許すことになり、心の成長にとっても良くないと伝えた。

#5 電話相談（C nから母親へ）

父親・母親・部活顧問・担任・C nの5人で事実確認と情報の共有をし、それを踏まえて今後の方針を決めたいと母親に提案し、「援助チーム」の形成をもちかけた。

保護者は最初尻込みをしていたが、チームで援助することの大切さを強調した。そして「顧問の人間性を直接確かめてもらいたい」「子どもの話だけではなく、顧問の話聞いて、総合的に判断することが適切な対策を立てるうえで大切だ」と説明した。

母親は「主人は仕事が忙しくて学校へ行くのは難しい」と言ったので、前回の父親面接で「本人にとっていまが最も大切な時期なので多少無理をしてもお父さんの協力が必要です」と頼んだらお父さんも快く承諾してくれたと伝えた。あまり夫婦で話をしていないのかなと感じたので、「いまこそ夫婦が一丸となって事にあたるのが大切です」「いまは伯父ではなく、父親の存在を子どもに示す絶好のチャンスです」と説明した。ここでは〈保護者システム〉の確立がポイントだと判断した。

#6 校内面接（同席者：母親、伯父、担任、部活顧問、C n）

最初母親、伯父、担任、C nの四者で話をした。前回の面接や電話相談のときとは違って、とてもソフトで穏やかな雰囲気の中で話がはずんだ。本人の退部届けの理由欄に「部活のみんなに迷惑をかけてしまった」と書いてあったと母親が話した。

その後部活の顧問にも同席してもらい、部活動の方針や本人とのやり取りについて詳細に説明してもらった。顧問の先生には問題がないことを母親、伯父ともに十分に理解してくれた。

翌朝、母親から担任に電話があり、今日登校するとの連絡を受ける。約3週間振りに登校してきたが、特別扱いせず普通どおりに接するように担任にお願いした。

#7 家庭訪問（同席者：父親、母親、担任、C n）

本人の心理状況、接し方、父親の役割などについて終始穏やかに笑いを交えて会話をした。中学校の時は友達の支援と伯父の説得により登校できたが、今回は両親が協働して家庭のなかに精神的に「自由で守られた空間」を確保し、そこで本人が安心して過ごすことができれば継続して登校できるようになると判断した。家族本来の機能を取り戻せば子どもは必ず立ち上がると体験から直観した。

そこで両親を支援し両親を通じて本人に登校を働きかけることにした。

父親は内向的だが聡明な人なので、「いままで子どもとの関わりが不足していたことを反省している」と話していた。嬉しい情報としては、先週子どもと一緒に父親がスポーツセンターに行ったが、こんなことは今まで一度もなかったと母親が言っていたことだ。

父親には、趣味の釣りに連れて行ったり、自分が学生時代に感動した本や音楽や絵画などを勧めたり、コンサートや映画と一緒にいたり、とにかく一緒に行動して時間と空間を共有して楽しんで欲しいとアドバイスした。

このケースでは本人へのカウンセリングは1回しかしていない。筆者はC oというよりC nに徹して、本人の周囲にある資源を見つけて、その良さを引きだし、みんなで支援するという「チーム援助」にもとづいて対応したにすぎない。

最後に、部活動の仲間、クラスメートからメールがきたり、直接会ったときに励まされたりしたので登校意欲が高まってきたらしい。1週間後に、本人が登校したと担任から知らせをうけた。4週間の関わりで終了したケースだった。その後も多少の欠席はあったが担任レベルで対応できる程度だった。本人は3年次には成績優秀者になり、進路目標も明確だったので現役で大学へ進学した。

〈考察〉

このケースの場合、不登校になった理由を特定することはできないが、あえて指摘すれば、①家庭内での父親の存在感がないこと、②本人の軽い発達障害によるものと思われる。

男子は父親との依存・対立を繰り返して成長するというのを、第1回目の面接から両親と伯父には何度も説明した。夫婦で話し合い、それから本人と十分に話し合っ、子どもの将来の方針について考えて欲しいとお願いした。子どもが危機的状況にあるなら、睡眠時間を削ってでも学校に来て話したり、子どもと関わったりしてくださいとお願いした。本人の登校開始には〈保護者システム〉の確立がポイントになると判断したからだ。

なんとか伯父と面談をかさねたが、伯父の存在が〈保護者システム〉の形成過程には障害になると判断した。なぜなら〈保護者システム〉と本人の間に入ることで、保護者と子どもが向き合うチャンスを結果的に奪っているからだ。また部活動の顧問が家庭に来て本人と話すように要求することは本人の自主性を損ない依存性を

強化する結果になることを理解していないことが気になった。

伯父の影響力を薄めて、〈保護者システム〉を父親と母親を中心に確立させ、本人との向き合う親密な関係を形成するという方針は、学校カウンセリングやチーム援助の発想が拠り所となってくれた。また本ケースのキーパーソンは、部活動の仲間とクラスメートである。顧問と担任を通じて彼らの協力が得られたことが、不登校解決の最大のポイントである。

5. おわりに 今後の課題

〈学校と家庭との協働関係の促進〉

いじめ、不登校、無気力化、学力低下、規範意識の欠如等は、現代社会の本質的問題の現象化にすぎない。根本的な解決に必要なことは、家庭が本来の機能を回復することである。といっても、保護者だけで家庭の教育力を向上させることはできない。私たち教職員は、家庭の領域と学校の領域にひとまず境界線を引きつつも、学校がどれだけ家庭の領域に入り、家庭教育の問題をカバーできるのか、その学校力が試されている。これは現在私学教育の大きなテーマの一つになっている。

学校力を向上させるには、学校内部で教員同士が一つの目標に向かって協働できる体制の確立が不可欠である。その提案の一つとして、3年前の校内研修会で「チーム支援」を提言した。現在成果が着実にあがりつつある。5年以上前と比べると現時点で退学率や転学率は半減、2年以内には2/3減になるだろう。たとえ事情があって生徒が転学・退学したとしても、多くの先生が一人の生徒に親身に関わってくれたことに感謝の念を抱いている生徒や保護者も増えている。

不登校対策として早期発見早期対応が最善策と考えて採用した「3日ルール」も定着し成果をあげているが、カウンセリング等の研修を受けた教師が少なく、「3日ルール」に該当した生徒の面接が十分に出来なかった。今年度教育相談センターのメンバーを増員してもらったので、次の段階はメンバーが相談業務をこなせるような知識と技法を身につけてもらうことだと考えている。

〈学級経営の診断と育成プログラム〉

共同体型の日本の学校にとって学級経営は最重要課題である。ほとんどの生徒が同じ教室で同じクラスメートと毎日過ごしている。学級が自分の心のよりどころとなり、安心できる居場所になるような学級経営をしなければ、生徒の学校満足度が下がり、不登校傾向が高くなる。もし学級崩壊になったら生徒の学習権などの基本的人権さえ守れなくなる。これは私立学校にとって致命傷になる。

そうならないためにどうしたらよいのか。まず生徒の声を聴くことだと思い、学級経営状態を客観的に分析できる「アンケートQ-U」を今年度に初めて実施した。2回実施したが、2回目のほうが生徒の満足度が上がったが、それは学級経営の難しさと生徒のソーシャル・スキルの拙さによるといえるだろう。生徒の満足度を上げるには、まず自分の学級状態を把握できる力が必要である。担任が「Q-U」を分析できるようになれば鬼に金棒である。そのために来年度は、校内研修会で事例をあげながら「Q-U」の説明をする予定である。

〈ピア・サポートの導入〉

高校生になると、悩みを相談する相手は、両親でも先生でもなく、圧倒的に友人が多い。不登校傾向生徒の最大の資源が友人の場合がある。しかし相談をうけても、その生徒が自分のことで精一杯で相手の相談にのれないときもある。そんなとき適切に対応するためにピア・サポートがある。悩んでいる相手のためにも自分のためにも、ピア・サポートのトレーニングを受けていけば一生使えるスキルを身に付けることにもなるので、今後は、そういうことも実施する予定である。

〈別室登校制度の転換 教育相談室から相談学習室へ〉

本校には別室登校制度がある。なんらかの理由で不登校傾向になった場合、自学自習できる生徒に認められる単位取得制度の特例であるが、この制度も時代状況に合わせて整備していく必要がある。教育相談の現場は、より良い教育制度を作るためのヒントがたくさん隠されている分野だと思われる。そして今後の教育改革には理念も仕組みも異なるヨーロッパの教育制度が参考になるとと思われる。

以上のように、教育相談に携わることによって必然的に時代のニーズや社会の動きを感じられるようになる。学校現場において、分掌相互、教師相互、教師と生徒、生徒相互の各々の関係が変わらざるを得なくなる。それは学校の組織変革と意識変革をかならずともなう。

「生徒が抱えている問題発見・解決のシステムと校内支援体制」の確立を目標とすれば、必然的に「教育相談体制の変革」が進み、結果的に「学校の活性化」が起こらざるを得なくなると思われる。

(資料1) 生徒別個票

年 組 番 氏名 []

初回記入日 :平成 ○○ 年 月 日 →→→ 記入更新日 :平成 ○○ 年 月 日	
受 検 型	推薦・選願・一般 特典・特待 有 ・ 無
入試ランク	入試総合点
出身中学校	中学校 高校1年次クラス 組(教諭)
高校在籍クラブ	高校2年次クラス 組(教諭)
欠 席 日 数	中学校3年間()日 高校1年次()日 高校2年次()日
今年度の欠席	4月()日 5月()日 6月()日 7月()日 8月()日 9月()日 10月()日 11月()日 12月()日 1月()日 2月()日 3月()日
チェック項目	●以下の項目にハイカイエ等でご回答ください。 ・病気、けが等、欠席の理由が明確か。() 具体的に[] ・どちらかというと怠学傾向にある。() ・集団になじめず些細な理由で学校を休む。() ・保護者と生徒との信頼関係は良好。() ・登校して欲しいという保護者の意識は強い。() ・欠席連絡がある。(親・本人) () ・本人は両親と同居している。() ・その他、担任として気になるところ。() 具体的に[]
生徒の状況	〈HR担任の自由記述欄〉 ※今月の経過、過去と現在の生徒状況、今後の対応、他、時系列的に書く。 ※実際は拡大サイズ
生徒への対応	本人または保護者と、校内または家庭訪問で面談をした回数 保護者と、今月()回、総数()回。本人と、今月()回、総数()回。 ※実際は拡大サイズ

(資料2) 月末統計表

学 年	学 級	在 籍 数						授 業 日 数						出 席 停 止 日 数					
		月 初 在 籍 数	休 学 者 数	復 学 者 数	転 編 入 学 数	転 出 者 数	退 学 者 数	月 末 在 籍 数	授 業 日 数	欠 席 総 日 数	欠 席 率 (%)	遅 刻 総 度 数	遅 刻 率 (%)	早 退 総 度 数	早 退 率 (%)	忌 引	伝 染	出 停	
1	1																		
	2																		
	3																		
	4																		
	5																		
	6																		
	7																		
	8																		
	21年度小計																		
	20年度小計																		
19年度小計																			

(注)実際は全学年の情報をB4判1枚におさめます。

※1 欠席率の算出法(%)

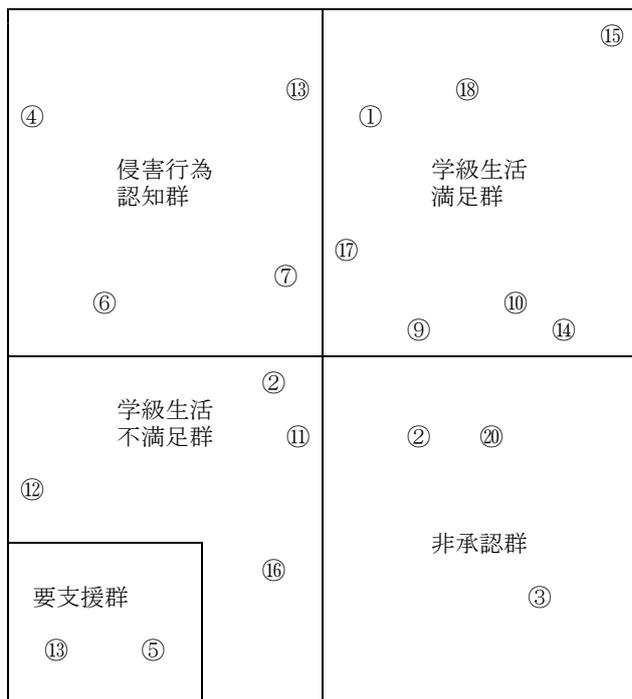
$$\frac{\text{欠席総日数}}{\text{在籍数} \times \text{授業日数}} \times 100$$

※2 遅刻・早退率の算出法(%)

$$\frac{\text{遅刻 or 早退総度数}}{\text{在籍数} \times \text{授業日数}} \times 100$$

※3 欠席・遅刻・早退率(%)は少数第1位(少数第2位四捨五入)で算出する。

(資料3) アンケートQ-U 学級満足度尺度 (なお図表の①~⑳はクラスの出席番号を示す)



アンケートの回答によって座標が決まり、左のような図表に出席番号が明示される。たとえば出席番号⑮・⑱の生徒はクラスに十分満足しているが、⑤・⑬の生徒はかなり苦しい状況に追い詰められ不安感が強いことが分かる。

Q-Uでは、生徒の置かれている状況を4つに分類して判断している。

学級生活満足群…学級内に自分の居場所があり学校生活に意欲的な生徒。

非承認群…いじめや悪ふざけを受けていないが、学級内で認められることの少ない生徒

侵害行為認知群…いじめや悪ふざけを受けているか、他の生徒とトラブルの可能性のある生徒

学校生活不満足群…耐えられないいじめや悪ふざけを受けているか、非常に不安傾向が強い生徒。

要支援群の生徒は、その傾向がさらに強い。いつ不登校になっても不思議ではないので、早めの支援が必要である。

(主要引用文献)

- ・石隈利紀 『学校心理学』(誠信書房)
- ・石隈利紀 『チーム援助入門』(図書文化)
- ・石隈利紀編 『チーム援助で子どものかかわりが変わる』(ほんの森出版)
- ・河村茂雄 『Q-Uによる 学級経営スーパーバイズ・ガイド 高校編』(図書文化)
- ・河村茂雄 『学級崩壊 予防・回復マニュアル』(図書文化)
- ・河村茂雄 『データが語る学校の課題』①・②・③(図書文化)
- ・河村茂雄 『グループ体験によるタイプ別学級育成プログラム』(図書文化)
- ・小林正幸 『教師のための不登校サポートマニュアル』(明治図書)
- ・中村恵子編 『学校カウンセリング』(ナカニシヤ出版)

(参考文献)

- ・岡田隆介 『家族の法則』(金剛出版)
- ・河合隼雄 『箱庭療法入門』(誠信書房)
- ・河合隼雄 『ユング心理学入門』(培風館)
- ・國分康孝 『カウンセリングの技法』(誠信書房)
- ・國分康孝 『エンカウンターで学級が変わる 高校編』(誠信書房)
- ・杉山登志郎 『発達障害の子どもたち』(講談社)
- ・杉山峰康 『こじれる人間関係』(創元社)
- ・田中康雄 『軽度発達障害のある子のライフサイクルに合わせた理解と対応』(学研)
- ・内藤朝雄 『いじめの構造』(講談社)
- ・中嶋博之 『君を守りたい』(朝日新聞社)
- ・森 俊夫 『先生のための やさしいブリーフセラピー』(ほんの森出版)
- ・森谷寛之編 『コラージュ療法入門』(創元社)
- ・諸富祥彦 『学校現場で使えるカウンセリング・テクニック』上・下(誠信書房)
- ・山中康裕 『心理臨床と表現療法』(金剛出版)
- ・独立行政法人教員研修センター 『不登校といじめ問題の解決のために』
- ・教育相談等に関する調査研究協力者会議 『児童生徒の教育相談の充実について』
- ・全国高等学校PTA連合会 『子どもを取り巻く人間関係の回復と社会環境の充実』
- ・全国高等学校PTA連合会 『世界の親子の絆意識』